

2011年度 関西学院初等部 学校評価を終えて

関西学院では、2007年の学校教育法改正を契機として、2008年度より初等部・中学部・高等部が互いに連携をとりながら各学校の学校評価（以下、自己点検・評価）を行うことを決めました。

初等部は2008年4月に開校し、4年目の歩みを終えようとしております。草創期であるが故になおさら客観的な評価を受けながら、さらにより良い教育活動を行っていききたいと考えております。

その一つの方法として、昨年度に引き続き、初等部教育について児童・保護者・教員にアンケートを実施しました。

初等部がアンケートした項目はまず、共通必須項目の「キリスト教主義教育」。そして、「学校評価ガイドライン」で示された項目のうち「教育課程・学習指導」「生徒指導」「研修（資質向上の取組）」「保健管理」の4項目。また、初等部独自の項目として「特色ある教育の実践」を加えたものです。

さらに、客観的な評価を得るため、学校関係者評価を実施しました。まず、今年度どのような目標をもって初等部教育に臨むのか外部評価者に報告し、その後外部評価者に学校の様子や授業を自由に見学していただきました。そして、初等部がアンケート結果を加味してまとめた自己評価の結果に関して、初等部自己評価委員会と意見交換し、初等部としての自己評価をまとめました。

回答いただきましたアンケートの結果を集計、分析したものを参考に自己点検・評価結果をまとめ、関西学院評価推進委員会（2012年3月23日）において承認されましたのでホームページ上で公表いたします。

初等部では自己点検・評価によって浮き彫りになった課題に真摯に向き合い、教職員でその課題を共有し、具体的に改善を図ってまいります。またその改善を社会に公表することによって学校への信頼を高めていく所存です。

次項以降に2011年度初等部の自己点検・評価結果を項目別にまとめたものを記しました。

2012年3月23日

関西学院初等部
部長 磯貝 暁成

学校評価シート

【キリスト教主義教育】

現状の説明

建学の精神である「キリスト教主義による全人教育」を具体化するために、初等部では毎朝の全校礼拝を何よりも大切に考えている。心を静め、聖書の言葉に耳を傾け、讃美歌を歌い、共に祈る時間が、児童や教職員にとって大切な時間となっている。礼拝では教師だけではなく、毎週、児童（3年生以上）が司会、お話、お祈りを担当し、日々の生活や様々な経験を聖書の言葉と結びつけて話をしている。また聖書科の授業、各宗教行事、宿泊行事などを通して、キリスト教の精神や価値観に触れることにより、「マスタリー・フォア・サービス」（社会と人のために自らを鍛える）の意味や、人としてどう生きるべきかについて考える機会をもっている。

キリスト教主義教育を担う教職員に対しては、キリスト教や学院のキリスト教主義教育についての研修会を実施し、新規採用の教職員に対しても、オリエンテーションの中で、同様の研修会を実施している。

保護者に対しては全学年の保護者対象の聖書講座に加え、2011年度より各学年ごとの聖書を学ぶ会（PTA）でも、キリスト教理解のための講座を開催している。また新入生の保護者に対しても、入学前の2回のオリエンテーション、入学後のオリエンテーションで、初等部のキリスト教主義教育についての講和を行い、キリスト教主義教育の理念を共有する機会をもっている。

評価・分析（アンケート結果を含む）

アンケート結果では、89%という多くの児童が初等部が特に大切にしているところの時間（礼拝）や聖書の学びが大切だと回答している。このことは、日々の礼拝や聖書科の授業に対する児童の姿勢からも分かり、初等部が大切に、伝えようとしていることが、児童たちに浸透していることが分かる。引き続き児童には礼拝や聖書の学びを通して、その大切さを伝えていきたい。

保護者への「学校は、キリスト教主義教育の理念について、保護者と共有する機会を設けているか」との質問に対しては、86%が肯定的な回答をしている。主に聖書講座を学院のキリスト教主義教育の理念を共有する機会としているが、2011年度後半からは「聖書を学ぶ会」（PTA）を学年ごとに開催しており、より多くの機会を通してキリスト教主義教育の理念を共有できればと願っている。また教員への「学校は、礼拝や研修を通してキリスト教教育の理念を共有する機会を設けているか」との質問に対しても92%が肯定的な回答をしており、研修会はもとより、児童と共に日々の礼拝がキリスト教主義教育の理念を共有、確認する機会として受け止められていることが分かる。

しかしながら、保護者への「学校は、キリスト教主義に基づき、人を思いやる気持ちや態度を育てている」との質問に対しては肯定的な回答が79%、教員への「学校はキリスト教主義教育を学校生活の中で具体化している」との質問に対しても肯定的な回答が76%に留まっている。人を思いやる気持ちや態度を育てるといふ、初等部が目指す教育の根本に関わる事柄だけに、教職員が教育活動全般にわたってキリスト教主義教育の理念を具体的に生かすことができるようにしていかなければならない。

改善の具体的方策

キリスト教主義に基づく教育を、初等部のあらゆる教育活動の中で展開していくためには、それに関わるすべての教員がその理念を理解し、共通理解をもって児童に向き合っていくことが必要である。そしてキリスト教主義教育を理念としてだけでなく、学校生活の中で具体化していくために、まず教員間の意識をより深めていくための研修や日々の学校の歩み

の中で、常にそのことを意識できる仕組みを作っていく。

また児童がキリスト教の価値観を生活の中で生かしていけるように、自ら学び体得していけるような授業づくり、プログラムを計画していく。さらに「人を思いやる気持ちや態度」を育てていくためには、保護者との連携が不可欠である。キリスト教主義教育の理念の共有だけでなく、その理念のもと、具体的に学校が何を大切に、児童に対してそれをどのように伝え、教育活動の中で展開しているのかを、各講座、個人懇談会、学級懇談会、家庭訪問をはじめ、日々の保護者との関わりの中で伝えていく。そして学校と保護者が共に児童を育てていくのだ、という意識を両者が持つことができるような関わりを積極的にもっていく。

学校関係者評価（評価者との意見交換を受けて）

キリスト教主義教育の柱の一つである礼拝の雰囲気や、児童の姿勢に対しては高い評価をいただいた。しかし、そこで語られる多くのことを児童が生活の中でどう具体化していくのが課題でもある。言葉として理解したことを、いかに家族や友だちとの関わりの中で生かしていけるのか。また特に低学年など、言葉としても理解できない児童に対しては、日常の体験活動を通して教えていくことが大切であるとの指摘をいただいた。礼拝や聖書科授業をはじめ様々な機会になされているキリスト教主義教育の働きが、児童の生活に生かされなければ意味がない。日常の体験活動を通して、どう具体的に児童を育てていくのかをしっかりと考えていきたい。

学校評価シート

【教育課程・学習指導】

現状の説明

新学習指導要領実施に伴い、本校でも本年度から新しいシラバスを作成して、教育活動を行っている。シラバスは、教育理念「キリスト教主義に基づく全人教育による人間形成」を中心に、教育目標、めざす児童像、初等部聖句により構成されている。まさに、初等部教育の骨組みである。授業者は、日々シラバスを確認しながら、計画的に授業を行ってきた。教員同士で頻繁に授業公開したり児童の学びの姿をもとに批評しあったりして、授業力の向上に努めている。

児童の学力は、学校で共通に設定している評価規準により把握し、学期末には通知書で連絡した。また、本年度より、これまで行ってきた夏休み中の家庭訪問、12月の個人懇談会に加え、5月にも個人懇談会を行い、各家庭との連携を深めるようにしている。

音楽や図工の学習の成果は、文化祭や作品展で、子ども、保護者、教職員が共有できるようにしている。

評価・分析（アンケート結果を含む）

「学校は、子どもの学力を把握している」という項目で、79%の保護者が、「強くそう思う」「どちらかといえばそう思う」の肯定的評価をしている。教師も学力把握に関して、88%が肯定的に評価している。一方、「学校は子どもの学力を保護者にきちんと説明している」という項目では、保護者の肯定的評価が71%と若干低くなっている。教師が把握した学力を保護者に具体的に伝えきれていない現状がうかがえる。

「学校は基礎学力が定着する授業を行っている」という項目では、75%の保護者から肯定的な回答が寄せられた。押さえるべき内容を確実に押さえる授業が評価されている。また、「学校は楽しくわかりやすい授業をするために工夫をしている」という項目に関しても、保護者の74%が肯定的な理解を示している。児童も92%が授業が分かりやすいと回答している。校内授業研修会が充実し、授業を工夫しようとする雰囲気が教師間で高まってきていることが影響していると考えられる。その一方で、「学校は、基礎的学習だけでなく、発展的な学習も取り入れながら授業を行っている」という項目に関する保護者の肯定的回答と「授業では、自分から調べたり、考えたりすることが多い」に対する児童の肯定的回答がともに67%に留まっている。発展的且つ主体的学習の充実が求められている。

芸術教育に関しては、保護者、教師、児童のいずれからも高い評価を得ている。日々の授業、その成果を発表する場である文化祭や作品展が認められていると考えられる。

改善の具体的方策

児童の学力については、これまで同様、評価規準をもとに的確に評価し通知書で連絡する。また、保護者に対して、教育講座や個人懇談会、学級懇談会などで繰り返し評価方法を具体的に説明する。さらには、連絡帳などを積極的に活用して日々の学習の様子をしっかりと伝えていく。

本年度使用したシラバスを実際に行った授業と照らし合わせながら見直す。基礎的学習と発展的学習のバランスをとりながら修正する。

校内研修会では、外部講師を招聘するなどして、今後ますます授業力向上に努める。その際、児童の主体的活動を引き出す教師の働きかけに着目し、話し合っていくようにする。

学校関係者評価（評価者との意見交換を受けて）

児童が自分の体力の伸びを具体的に知ることが大切なのではないかという指摘をいただ

いた。毎年 6 月に行っているスポーツテストの結果を伝える際、前年と比較するなどして成長がはっきりと見える形にしたい。児童自身が自分の体力をよりの確に把握することで、マラソン大会や体育祭、そして日々の授業への取り組みが一層意欲的になると考える。

児童の学力を保護者に説明することも大切だが、まずは授業でしっかり学力をつけることが大切であるという指摘をいただいた。シラバスに明示している教科・KGタイムそれぞれの学習内容を今一度確認するとともに、学習内容の定着につながる授業づくりに一層励む。

学校評価シート

【生徒指導】

現状の説明

集団生活に関するルールや社会生活をする上での基本的なマナーについては日常的に真摯に取り組んでいる。毎朝のミーティングの際にも、必ず生徒指導上のワンポイント対策や留意点について具体的に方策を挙げ、指導方針を全員が共有している。

学校生活においては、挨拶の励行啓発、持ち物や服装等の風紀指導、始業チャイム・下校時刻の順守、遊び方や場所の徹底、雨天時の過ごし方の工夫、校舎内走行禁止ルールの確立を全教職員が同一歩調で実践している。

教職員・児童の安全対応能力を図るための取り組みについては、教員研修として学校での事故など緊急事態発生時の対応能力向上のため救急救命実技講習や AED の操作訓練を消防署より講師を招聘して行なった。

ただ心配な現状としては、一部の児童に人間関係を形成する意欲やコミュニケーション能力、社会性、規範意識、我慢する力の弱さが見られる事実である。指導に対してもわがままな態度を見せ、欲求不満耐性が未熟なためかすぐに集団生活の中でトラブルを起こしてしまう児童の増加である。事態がなかなか改善されない学級経営に対して一部保護者が不安を覚え、担任への不信感を募らせる要因ともなってしまった。もちろん問題が生じた場合は、担任は即時保護者と連絡を取り合い、児童同士の間関係の背景を慮りながら、担任、学年主任、生活指導担当、学事主任、副部長と密に連携し、説諭段階も考慮しつつ誠実に適時性をもって指導を実施している。

評価・分析（アンケート結果を含む）

「集団生活に関するルールやマナーについて適切に指導している」と「命の大切さや望ましい仲間関係の育成などについて指導している」は 30%の保護者が、「子ども同士の間関係に配慮しながら指導している」については 40%弱の保護者が否定的な回答を寄せている。これは、昨年度比率と比べ憂慮すべき点である。平素の生徒指導や学級指導の強化・重点化をさらに促す必要性を感じる。

登下校においては、本年度も危機管理を含めた安全対策に主軸を置いた。宝塚駅と初等部を結ぶルート上に、警備員や誘導員を数名配置し、同窓会宝塚支部 OB で編成する「スカイレンジャーズ」の方々や PTA サポートとして保護者有志も立ち、通勤途上の教員と共に安全や車内マナーの指導、挨拶の啓発も日々継続していることは肯定的評価として表れている。

改善の具体的方策

配慮を必要とする児童や保護者は、一人の教師の理解や判断では十分にその状態をとらえることが困難な面がある。教員陣が彼らを正しく理解し、見方を少し変えたり、意識を変えたりするだけで、問題行動の抑制や担任のストレス等の解消につながる場合もある。校内においては担任のみに対応を委ねるのではなく、すべての教員で情報交流し合う機会を定期的にもつことで、一層の共通理解を進める必要がある。

児童の問題行動の一部で指導上問題を起こした児童・保護者への対応や被害者保護などについて、初等部教員の協力体制だけでは十分に対応できない状況が起こることもある。その際は、スクールカウンセラーも含め、保護者の了解を得ながら医療機関や学院の相談機関とのサポート体制および連携を高めていくことで納得のいく円満な解決を導く。

学校関係者評価（評価者との意見交換を受けて）

改善の具体的方策で記述したことをふまえ、生徒指導面も本学の礎たるキリスト教主義に基づいて、全人教育による高い倫理観と豊かな情操も育めるよう邁進していく。子どもたちには、忍耐力も含めた強い意思を育て、社会と調和しながら健全に生きていくための心と智慧も身につけさせていく。日々の学校生活や社会生活においても規範を守らせ、お互いを認め理解し合おうとともに、自分で判断し行動できる自主自立の精神を培っていく方向性を明確に打ち出して取り組んでいく。

学校評価シート

【研修】

現状の説明

昨年度に引き続いて、全学年の児童が揃う草創期に合わせて、今年度も研修テーマを「尊重しあい、学びあう学校をつくる」と設定し、研修を進めてきた。具体的には、全ての教員が担当教科を受け持ち、年度内に校内公開授業を1回、また、教科を3つの部会に分け、各部会で1名ずつが研修授業を行い、計3回の研修授業会（部会の授業検討会、事後の討議会を含む）を行った。同時に、研修全体会を月に1回程度設定し、キリスト教研修会、人権研修会（児童理解のための報告会 など）、学校生活上のコミュニケーション力向上研修会、命を守る研修会（AED利用講習）を行ってきた。

校外研修では兵庫県私立連合会の半日研修会や一日研修会、および、各教科での主任会に参加し、キリスト教学校同盟関西地区教員研修会にも全員が参加した。また、各個人が夏季休業中を中心に研修計画を立て、様々な研修会に参加し、意欲的に研修を進めてきた。さらに、有志による「教師力向上プロジェクトチーム」を発足させ、基幹学力セミナーや超一流に学ぶセミナーに参加し、初等部に戻ってその内容を周知し、広げることも進めてきた。

また、キリスト教に関する研修としては、すべての教員が「こころの時間」の説話を担当する際に、宗教主事と聖書の内容について詳細に準備をしたり、宿泊行事の準備段階でテーマとなる聖書の箇所について研修を深めたりすることができてきた。

職員は職場内研修として「私立小学校の成り立ちと変遷」「『お受験』の在り方」などに目を向け、「現在の小学校受験を取り巻く状況」について、適宜、研修を進めてきている。

評価・分析（アンケート結果を含む）

アンケート結果からは、教職員の「授業研究をし、不断の努力をしている」が91%、「授業研究を通して、自身の授業力の向上に努めている」が91%と授業研究について、昨年度と数値は変わらず、高い肯定的な結果をみることができている。しかし、保護者の「楽しく分かりやすい授業にするために工夫している」では90%→84%、児童の「授業はわかりやすいですか」でも96%→92%とやや数値が低くなっていると同時に、「まったくそう思わない」との回答が6%、1%という数値が出ていることには着目せざるを得ず、これからの研修のあり方を考える契機とするべきである。

キリスト教に関する研修の成果として、教職員の「礼拝や研修を通してキリスト教主義教育の理念を共有する機会を設けている」では92%と昨年以上に向上が見られた。しかし、教職員の「授業研究や公開授業を通して、自身の授業力の向上に努めている」については76%が肯定的に答えており、まだまだ十分とはいえない。同様に、「研修部の教員研修計画に基づき、授業研究や公開授業を実施している」でも、80%の肯定的な回答にとどまっている。これらからは①教員間での研修に対する意識の差異、②研修部の運営の在り方、などを改めて検討していくことが危急の課題であると読み取れる。

また、児童の「授業はわかりやすいですか」では92%が肯定的だが、1%が「まったくそう思わない」と答えており、保護者の「学校は、基礎学力が定着する授業を行っている」では昨年88%だった肯定的な評価が75%に下がっている上に、「まったくそう思わない」が1%→6%と増えている。同時に、「学校は、楽しくわかりやすい授業にするために工夫をしている」についても、肯定的な評価は90%→74%、「まったくそう思わない」が1%→6%となっていることは残念であり、研修の立場からも重く受け止めたい。

以上の結果から、教員自身、授業を受ける児童、その保護者も現状の教育、特に授業の在り方について課題意識を持っていることが分かり、また、その改善を早急に進めていくことを求められていると理解できる。

改善の具体的方策

アンケート結果から①教員間での研修に対する意識の差、授業力や実務能力の差を埋める必要 ②教員研修プログラムの計画的な実施 ③新規採用者および新任教員に対する研修の推進 などが危急の課題であることが明らかになった。①については、全体会だけでなく、小集団での部会を開いたり、個別に指導を行ったりするなどして、改善に努めたい。②今年度は3学期に授業公開をする計画もあったが、種々の課題が生じたため実施ができなくなった。そのため、公開授業回数が各教員1回となり、具体的な授業研究の機会が減ってしまった。今年度を踏まえ、年度当初により綿密に計画を立てて実施していく。③は昨年度から引き続いた課題で、アンケート結果だけではなく、日々の学校生活で見られる課題である。研修部だけではなく、学校全体で改めて向き合っていく最大の課題であると認識している。これについても年間の計画を立てて、真摯な態度で臨み、進めていくこととする。今年度、中学部への進学を初めて行うことで、中学部との連携が強化し、具体的な児童の成長や学力、卒業までへのシラバスや伸ばしたい力などが明確になってくるので、それらに焦点を当てて『中学部への進学や中学部との連携を踏まえた研修計画作成』を再度設定したい。

学校関係者評価（評価者との意見交換を受けて）

アンケートの個々の数値に一喜一憂するのではなく、初等部の教育を進めていくことを大事にする。

「わかるとはなにか」というような教育の根本を見つめなおしながら、「学校が伸びる」ためには、教職員一人ひとりがどのような「めあて」を持つのかという視点から、より具体的な目標を持って、研修に取り組むことを第一歩とする。

アンケートの結果からその原因を探り、より具体的な方法でその解決へと歩いていくようにする。

関学タイムをはじめとする授業の中で、児童が「自ら学ぶ」ことにより着目し、展開や構成を工夫していく。

学校評価シート

【保健管理】

現状の説明

① 保健に関する体制・整備、指導・相談

2011年4月～12月の保健室利用件数は4339件あり、一日あたり平均31.8件であった。来室理由は外科（けが）：内科（病気）＝3：1である。学年では1年生の利用が最も多く全体の約3割を占める。1年生の98%に保健室利用経験があり、学校生活の始動期の子どもたちと保健室の関わりは非常に大きい。新しい環境での「集団」生活を安心して始められるよう、保健室での「個」の関わりは特に担任教諭や専科教諭とも活発に情報交換を行い、子どもの心身のケアに努めている。

学校全体においても、92%の児童の保健室利用があった。保健室が多くの子童に開かれている一方で、保健室が複数の子童もでにぎわうために、子どもと落ち着いて話したり相談を受ける環境は保ちにくくなってきている。カウンセラーは週2回来校しているが、保護者・児童ともに希望者が多く予約を入れにくい場合がある。

養護教諭不在時においても教員が誰でも対応できるようマニュアルを作成し、危機管理を踏まえ保健室を整備している。

② 家庭や医療機関との連絡・連携

学校での病気・怪我発生時には、電話や連絡票による報告をし、必要があれば受診勧告を行っている。安易な判断を行わず、学校医やカウンセラーとの連携を強化し、意見を聴取している。

③ 健康管理、疾病予防、健康教育

学校において配慮の必要な児童は、内容と必要性に応じて担当者～教員全体に情報が共有される。持病やアレルギー疾患をもつ児童が多いため、宿泊行事前には特に念入りに家庭、教員、宿泊先との情報共有・連携が行われている。また、保健室来室者の記録は児童や学級の状況が反映される場合も多くあり、各学年に毎週報告がなされている。

基本的な生活習慣（うがい・手洗い・換気・マスクなど）は学級において繰り返し指導している。感染症発生時には学内の掲示板（イントラネット）において教職員への周知を即時に行い、指導強化とともに行事实施の方法を検討するなど、感染拡大の予防に努めている。今年度は全国的な感染症流行のなか、初等部においては平穏に経過している。児童の健康管理能力向上のため、「ほけんだより」やポスター掲示により、時節に応じた内容の健康教育を行っている。

評価・分析（アンケート結果を含む）

アンケートは上記①②③の項目について実施されており、一般的に肯定的回答の割合が高く、今後も継続して保健管理に努めたい。以下の点についてはアンケート結果に注目すべき点があり、課題としてとらえている。

「心配事ができたら、先生やカウンセラーに相談できますか」という質問に対し、児童の肯定的回答は37%にとどまる。この回答結果は、教員への信頼という心理的な面だけでなく、相談する時間と場が確保されているかどうか、環境要因も影響すると思われる。

「学校は児童が抱えている様々な課題を受け止める体制を整えている」という問いに対し、教員の肯定的回答は60%となり、前年度を大きく下回る。小学校における「課題」の急増と複雑化は指摘されており、初等部においても例外ではない。これは保健管理にとどまらず、学校教育全体において対策を要すものである。

保健室利用件数は昨年度より約3割増加し、多い日には一日の利用が50～60件にのぼる。保健室の体制は年々充実させてきているものの、マンパワーは同一のまま業務が拡大し、きめ細やかな対応に苦慮する場面が増えている。保健管理のさらなる充実を実現するには、学

校全体での理解と協力が不可欠であり、組織活動の推進が必要な段階へと移行している。

改善の具体的方策

保護者にとって、安心して子どもを預けられる学校づくりを目指したい。その方策の一つとして、学校での保健分野の取り組みをわかりやすく示し、かつ保護者の要望を正確に知る必要がある。そこで毎月発行する「ほけんだより」に、保健室から発信する情報欄と、保護者からの自由記述欄をもうけ、双方向の伝達を促していく。

児童には、必要とする時に相談できる環境を整えたい。プライバシーと利便性の保たれる場所を確保するため、カウンセリングルームの使用方法などを再検討していく。

さらに教員にとって、問題解決の体制作りは分掌を越えて推進すべき大きな課題である。保健管理においては、教育相談体制を生かした活動を展開する役目がある。目標設定や各々の役割分担を明確にするために、たとえば記録・評価シートを導入し、調整役を果たしていきたい。

学校関係者評価（評価者との意見交換を受けて）

「初等部児童の通学圏は非常に広いと思われるが、急な病気や怪我の際の対応はどのようにしているか」…早退においては安全面に配慮し保護者の迎えをお願いしている。怪我による受診においても、保護者の迎えを待つことを基本としているが、遠方であるために時間のかかる場合も多く、緊急性を判断し教職員が伴い近隣の病院を受診することもある。また、共働きや乳幼児が家庭にいるなどの事情にも配慮し対応しているため、学校内で休養することも多い。

「先生やカウンセラーに相談できるか、との質問への肯定的回答が低い。一方で保健室来室児童は増加している。相容れない事象に見受けるが、分析がほしい」…児童にとって身近な相談相手とは友達や家族であることが自然である。児童の心理的サポートの実態を把握するという意図であれば、その質問文が適切であるか検討の必要がある。また、保健室の状況を省みれば、「相談する」というほどの重大さでなく、「聞いてほしい」という欲求の受け皿となっているように感じる。実際、処置を必要としない病気や怪我の来室も多く、退室時に子どもの表情が晴れ晴れしていることが、保健室のケアの成果と考えている。

「コミュニケーションに困難を伴う児童が増加している。カウンセラーだけでなく、教師もまたカウンセリング・スキルを身につける必要がある」「保健室は『心の居場所』としての大切な役割を担っている」…子どもの特性をとらえて良い関わりをもつことは、すべての教師の務めであり、同時に難しい課題となっている。子どもを単一の視点で見誤ることのないよう、学年団での協議を活発に行うよう配慮されている。子どもを中心として教員の一致を目指すよう、さらなる努力を続けたい。特に保健室では綿密な記録を実践しているため、情報共有の糧としての利用方法を発展させていきたい。

「保健室の逼迫した状況は高中部においても同様である。養護教諭の複数配置が必要ではないか」…保健室の機能が求めに応じる形で発展してきているために、その役割は拡大の一途にある。そのため、近年、養護教諭の複数配置を求める動きは活発であり、その意義と課題が注視されている。初等部においてはそれ以前に、校務分掌に「保健管理」が確立していないことは明らかな問題であり、組織活動を進めるために分掌の見直しを求めている。

学校評価シート

【特色ある教育の実践】

現状の説明

初等部では開校当初からオール関西学院サポートシステムを取り入れ、関西学院に連なる一員としての自覚をもち、エルダーズとのふれあいを通して人としての幅を広げ、一貫教育としての魅力を感じられるよう意図して行事を設定してきた。

また、CCT（カナダ・コミュニケーション・ツアー）を初等部教育の全てを発揮できる場と位置づけ低学年から「光の時間」で英語コミュニケーション能力の育成と国際性の萌芽をねらってきた。さらにオール関西学院サポートシステムとも連動させ、学院留学生との交流を3年で、カナディアン・アカデミーとの交流を2年で実施してきている。

評価・分析（アンケート結果を含む）

オール関西学院サポートシステムに関しては保護者の90%、児童の93%が肯定的に受け止めている。また教員の88%がエルダーズと有機的に連携協力して指導していると回答している。保護者の数値については児童からの間接的な話を聞いての判断であり、実際に児童とエルダーズがふれあっている場を見学しているわけではない。

留学生や異校種間交流の連携推進に関しては保護者の89%が肯定的に受け止めている。一方、教員は72%にとどまっている。開校4年目で全教員が留学生との交流、カナディアン・アカデミーとの交流、カナダ・コミュニケーション・ツアーの引率に直接かかわっていないことも一つの要因であると考えられるが、それぞれの活動内容、交流をより意義のあるものに改善すべきであるという意見も含まれているのではないかと受け止める。

改善の具体的方策

オール関西学院サポートシステムに関しては、保護者、児童、教員とも高く評価をしていることを受け止め、より魅力的なプログラムを取り入れつつ、今後も引き続き実施していく。さらに理解を深めてもらえるよう、保護者が見学する機会を設けるべく行事を調整していく。加えて、初等部を志望する幼児・家庭に対して学校説明会などの折にKGSOを実施して、16年一貫教育のよさを訴えることが初等部だけではなく大学の魅力をアップさせることにつながると考え、入試委員会とタイアップし計画をすすめる。

留学生や異校種間交流の連携推進に関しては保護者の89%が評価をしているという現実を踏まえ、さらに魅力的な内容を加味しつつ継続発展させていく。この点については他私学との差別化が顕著に表れるところであるだけに、外部にもアピールし広報していくことが学校としての評価を高めることにつながると理解している。

学校関係者評価（評価者との意見交換を受けて）

大学をはじめとして、学院に連なる多くの人が初等部の教育活動に携わっていただき、貴重な体験をさせていただいている機会が多いことは、他校からみると羨ましく思われるほどであると受け止め感謝している。また、その活動は先輩方からマスター・フォア・サービスを直接、体で学ぶことのできる貴重な時となっていると同時に、その協力に対して対価を全く求めない関西学院の奉仕の精神は教員、児童に十分に伝わっている。引き続き、感謝しつついろいろな工夫を込めて発展させていく。

中学部生が初等部訪問をし「初等部生に何かをしてあげたというより、心の時間などの祈りの姿や讃美歌の歌声、学習に取り組む姿などを見て、逆に刺激になった」と感想を述べてくれた。中学部生徒と初等部児童との交流は「してもらう」側の児童にとってだけでなく、中学部生徒にとっても価値のあることであり、関西学院全体として幅の広い学びが保障でき

ているという点で一貫教育の強みを出せる格好の取り組みである。引き続き、発展させていく。

2011年度 学校評価 実施項目一覧（初等部）

大項目	小項目	目標	アンケート		
			教職員用	保護者用	児童用
初等部全般				1. 子どもは、学校に行くのが楽しいと感じている。 2. 初等部の教育には満足している。	1. 学校は楽しいですか。
共通	キリスト教主義教育の理念の共有	教職員間でキリスト教主義教育の理念を共有する。	1. 礼拝や研修を通してキリスト教主義教育の理念を共有している。	3. 学校は、キリスト教主義教育の理念について、保護者と共有する機会を設けている。	2. こころの時間や聖書の勉強は大切なことだと思いますか。
	キリスト教主義教育の推進	キリスト教主義教育を学校生活の中で具体化する。	2. 学校はキリスト教主義教育を学校生活の中で具体化している。	4. 学校は、キリスト教主義に基づき、人を思いやる気持ちや態度を育てている。	
ガイドライン	児童の学力・体力の的確な把握	評価規準に基づき、的確に児童の学力を把握する。	3. 児童の客観的な学力把握に努めている。	5. 学校は、子どもの学力を把握している。	—
		評価規準を設定し、それに基づく的確な評価を行う。	4. 評価規準により、的確な評価を行っている。	6. 学校は、子どもの学力を保護者にきちんと伝えている。	—
		運動能力テスト等を通して、児童の体力、運動能力を把握し、体力・運動能力の向上に資する。	5. 児童の客観的な体力把握に努めている。	7. 学校は、子どもの体力を把握している。	—
	各教科の特性に応じた授業への工夫と児童の興味・関心に応じた授業展開	基礎的、基本的な内容の定着、および発展的学習の展開のため6年一貫シラバスを作成し充実させる。	6. シラバスによる計画的な授業を行い、児童にその内容を定着させている。	8. 学校は、基礎学力が定着する授業を行っている。 9. 学校は、基礎的な学習だけでなく、発展的な学習も取り入れながら授業を行っている。	3. 授業では、新しいことをたくさん知ることができますか。
		魅力的な授業づくりのための工夫。	7. 授業研究を積み、質の高い魅力的な授業を展開できるよう努めている。	10. 学校は、楽しく分かりやすい授業にするために工夫をしている。	4. 授業はわかりやすいですか。 5. 授業では、自分から調べたり、考えたりすることが多いですか。
	芸術文化活動	様々な芸術のそれぞれのよさを見出すとともに、自分の願いをこめて、音楽作品、美術作品をつくりあげる喜びを感じ取る。	8. 学校は、音楽、美術（図工）を中心とした芸術教育を通して、児童の豊かな感性を育成するよう努めている。	11. 学校は、音楽、美術（図工）を中心とした芸術教育を通して、子どもの豊かな感性を育成している。	6. 音楽や図工の授業は楽しいですか。

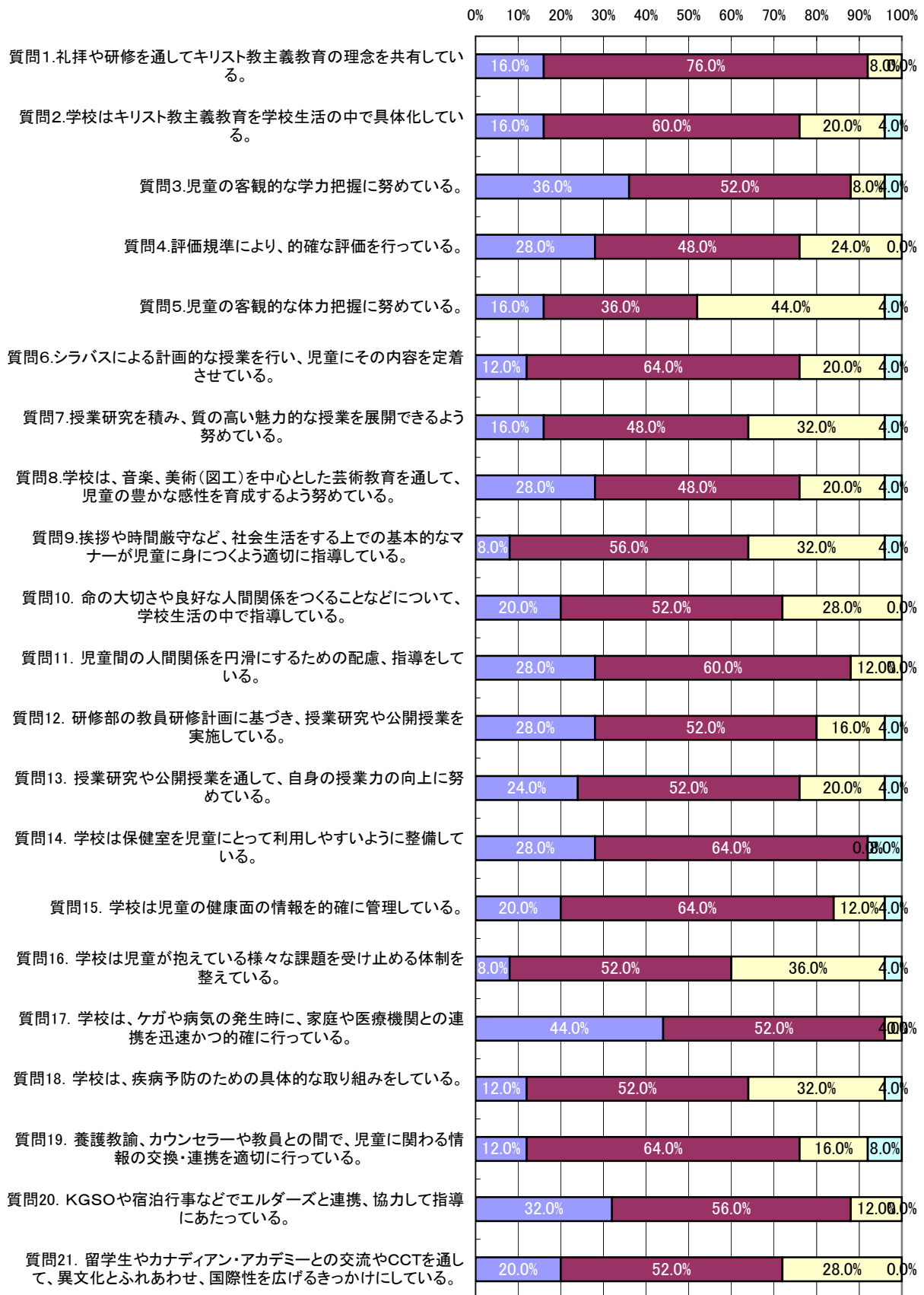
2011年度 学校評価 実施項目一覧（初等部）

大項目	小項目	目標	アンケート		
			教職員用	保護者用	児童用
ガイドライン 生徒指導	社会の一員としての意識についての指導	挨拶や時間厳守など、社会生活をする上での基本的なマナーについて指導する。	9. 挨拶や時間厳守など、社会生活をする上での基本的なマナーが児童に身につくよう適切に指導している。	12. 学校は、集団生活に関するルールやマナーについて適切な指導をしている。 13. 学校は、しっかりと挨拶ができるように指導している。	7. 学校のきまりを守って生活していますか。 8. だれにでも元気よくあいさつをしていますか。
	命の大切さや良好な人間関係などについての指導	命の大切さや良好な人間関係構築など、社会の中で生きる上で大切なことについて指導する。	10. 命の大切さや良好な人間関係をつくることなどについて、学校生活の中で指導している。	14. 学校は、命の大切さや望ましい仲間関係の育成などについて、指導している。	9. 学校で、命の大切さやなかまの大切さなどについて学んでいますか。
	豊かな人間関係づくりに向けた指導	豊かな人間関係づくりのために、適切な指導を行う。	11. 児童間の人間関係を円滑にするための配慮、指導をしている。	15. 学校は、子ども同士の人間関係に配慮しながら指導している。	10. 思いやりのある友だちが多いですか。 11. 友だちが困っていたら、助けていますか。 12. 友だちの意見や考えをよく聞いていますか。 13. 相手の気持ちを考えて行動することができますか。
ガイドライン 研修（資質向上の取組）	授業研究の継続的实施など、授業改善の取組	授業研究を継続的に実施し、授業改善に取り組む。	12. 研修部の教員研修計画に基づき、授業研究や公開授業を実施している。	-	-
		授業研究会、交流授業を継続的に実施し、各教諭の授業力を向上させる。	13. 授業研究や公開授業を通して、自身の授業力の向上に努めている。	-	-
ガイドライン 保健管理	児童を対象とする保健に関する体制整備や指導・相談の実施	保健室を、児童に利用しやすいように整備する。 児童の健康面の情報を的確に管理する。 児童の様々な相談を受け止める体制を整える。	14. 学校は保健室を児童にとって利用しやすいように整備している。 15. 学校は児童の健康面の情報を的確に管理している。 16. 学校は児童が抱えている様々な課題を受け止める体制を整えている。	16. 学校は子どもの心身の健康について把握し、疾病予防のための具体的な取り組みをしている。	14. 心配ごとができれば、先生やカウンセラーに相談できますか。
	家庭や地域の保健・医療機関等との連携	ケガや病気の発生時に、家庭や医療機関との連絡を迅速に行う。	17. 学校は、ケガや病気の発生時に、家庭や医療機関との連携を迅速かつ的確に行っている。	17. ケガや病気の発生時に、学校は家庭への連絡をきめ細かに行っている。	-
	日常の健康観察や、疾病予防、児童の自己健康管理能力向上のための取組、健康診断の実施	健康診断を定期的に実施する。 疾病予防のための取り組みを具体的にを行う。 養護教諭と教員間で情報交換・連携を行う。	18. 学校は、疾病予防のための具体的な取り組みをしている。 19. 養護教諭、カウンセラーや教員との間で、児童に関わる情報の交換・連携を適切に行っている。	18. 学校は、子どもの心身の健康について気軽に相談できる環境を整えている。	-

2011年度 学校評価 実施項目一覧（初等部）

	大項目	小項目	目標	アンケート		
				教職員用	保護者用	児童用
独自	特色ある教育の実践	オール関西学院サポートシステムの活用	初等部内の人間関係だけでなく、連なる関西学院のエルダーズとのふれあいを通して人としての幅を広げる。	20. KGSOや宿泊行事などでエルダーズと連携、協力して指導にあたっている。	19. 学校は、いろいろな場面で大学生とのふれあいを設定し、児童に楽しく活動をさせるようにしている。	15. KGSOは楽しいですか。 16. 自然体験キャンプやリトリート・キャンプでエルダーズとふれあうのは楽しいですか。
		留学生や異校種間交流の連携推進	留学生や関西学院外の人とのふれあいを通して異文化にふれ国際性の視野を広げるきっかけにさせる。	21. 留学生やカナディアン・アカデミーとの交流やCCTを通して、異文化とふれあわせ、国際性を広げるきっかけにしている。	20. 学校が行っている留学生やカナディアン・アカデミーとの交流、カナダ・コミュニケーション・ツアーなどは児童の国際性を広めるきっかけになっている。	—

2011年度 学校評価アンケート集計結果
(初等部・教員)



■ 回答番号1: 強く思う

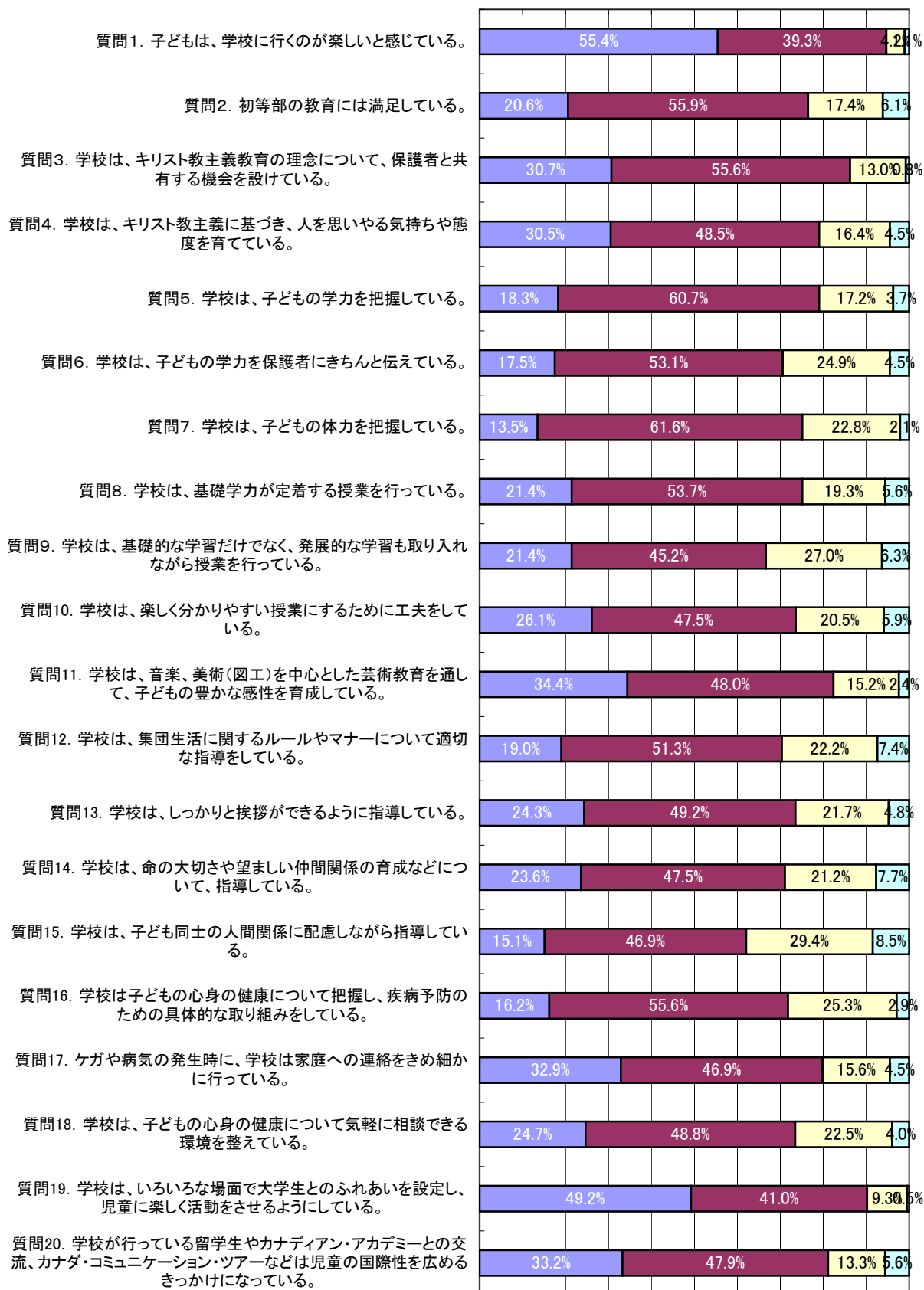
■ 回答番号2: どちらかといえば思う

□ 回答番号3: あまりそう思わない

□ 回答番号4: まったくそう思わない

2011年度 学校評価アンケート集計結果
(初等部・保護者)

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



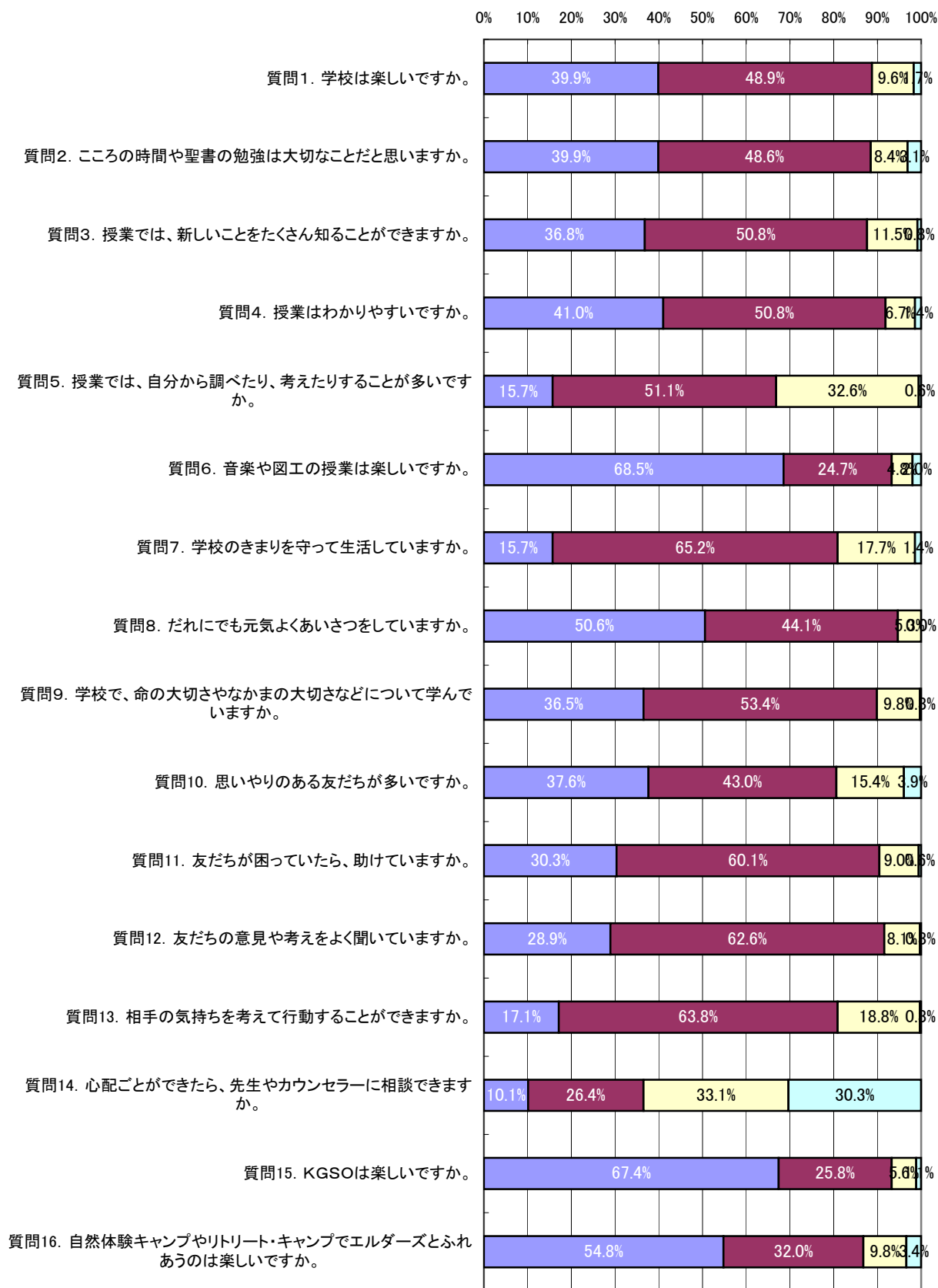
■ 回答番号1: 強く思う

■ 回答番号2: どちらかといえば思う

□ 回答番号3: あまりそう思わない

□ 回答番号4: まったくそう思わない

2011年度 学校評価アンケート
(初等部・児童)



■ 回答番号1: 強く思う

■ 回答番号2: どちらかといえば思う

□ 回答番号3: あまりそう思わない

□ 回答番号4: まったくそう思わない